

伊香保志 卷一

⊗  
i 62



3冊  
492.54  
IK  
1

No. 2148  
12 i 62



富士川文庫

2721

油

福



師

醫道



溫

已卯之秋

研堂



群馬縣令捐取素彦君

題詩



柴道真象煙上揚人家樓  
壑路登々半忠厚多筆衝  
而之起重閣飛樓層又層  
華清樓閣屹巍々畫棟朱

子  
卷

題詩

一

天香樓藏辛

簾倚翠冰一自璇宮停玉  
輦槽湯今日有光輝

人道汝功宜學生香山靈  
水古多情小樓簾影少  
梧花琴瑟相和夜雨聲

枯草蘓兮病骨仙奇功  
萬客誇靈泉闔御汝得  
汝得水又浴山都幾頃田  
與疾活山宮萬千煙霞喚  
我相流連汝餘刻已一枝



葦草起香湯志幾篇

興己卯秋日秋萍居士題



百里生書



葦草起香湯志幾篇

序言

一去年の八月廿のき暑中の暇賜を蒙りて上野なる伊香保乃温泉に申合せんやて出でたる日九月日伊香保なる湯戸木暮八郎ぬしの家より到りて其の家の屋敷ありと定めて近きゆきを榛名ニ以嶽船尾ふんどいづる山より諸勝をめぐりてして、ゆきの日をを送るた日頃を遊ばる人の中より田中芳男、鱸松塘、森春濤、岸田吟香等の大人を以て加ふるを睦びのち中より日おやに集ひ家のつらじを以て交へりて酒を以て暑をも忘るる

ある時、ゆりじの以んらく、ゆりや、ゆりやとせんを、年々、未  
 まに、客人のいと多むのほむと、まも、梅の、木、満、ま、の、土、地  
 の、事、語、不、聞、う、せ、ん、也、ま、と、を、古、ま、事、の、跡、を、記、し、傳  
 へ、た、る、書、ども、も、ま、ま、や、ま、ま、志、む、く、向、ま、ら、れ、と、往、時、  
 其、れ、の、事、書、ふ、ま、る、し、書、や、を、ま、ま、ま、ま、又、い、く  
 に、語、ら、ん、も、い、ま、い、る、あ、ま、ま、れ、い、う、を、先、生、の、ゆ、り、み、其、  
 多、い、と、ぬ、い、と、ふ、事、物、ま、ま、の、事、物、ま、ま、の、事、物、ま、ま、  
 客、人、多、ま、ま、便、互、ま、ま、や、ま、ん、や、語、ま、ま、ま、ま、ま、の、事、  
 去、年、の、夏、家、兄、如、雷、大、人、が、ま、の、み、に、遊、れ、し、  
 左、を、り、思、ひ、お、こ、れ、ま、ま、ま、ま、果、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 序言

より、み、や、り、い、づ、る、時、も、い、づ、る、を、我、り、代、筆、執、り  
 其、れ、の、言、を、ま、ま、ま、ま、事、物、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 書、ま、ま、ま、ま、伊、香、保、志、と、題、せ、し、ま、ま、の、書、ま、ま、ま、ま、  
 旅、の、や、ま、ま、文、獻、の、徴、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 頃、ゆ、り、ま、ま、ま、ま、其、の、草、稿、を、ま、ま、竹、中、邦、香、君、に、ま、ま、  
 一、り、君、以、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 以、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 其、の、由、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 序言



此子と云は乃海形くもかきいなる人との人まごとくはくはしよ  
なりかく物すきとをそありぬ

一 此の廿篇にもはら引用する書を上野名跡志嘉永六年

上野國緑野郡藤岡の人 富田永世著板本七冊なりその外ハ引用書目ヲ舉げた

がめし尚書目より洩きたるを引きたる所に書名を出

せり跡部光海の著者伊香保紀行を板本三冊

ありて索むればも得た遺憾の事あり又松のしが親と

至居し地を論毎けきぐも足跡の及むをてを諸書

據り又を土人乃話と聞きて記しはる條も何れもむかし

そ考のありしも今を事のかりなるもいふ所し曉ん人あら

序言二

左めてよ

一 獨逸の人別爾都氏といへる著せる日本鑛泉論や

いふ書近よ訳翻譯しとて板あり殊に伊香保の

泉質、功能、湯治法、養生法をあげあしと記を求め

て覽るをせし

一 伊香保の地を食物、貨物何れをまづを足るをわたりと

言ひまがし皆品劣ると價も貴しその貴たを堪ふべと

もいふる人粗らうの忍ぶるゆも何れはみやふあり

に遊むん人を茶、烟草、をわしあんど調へて行くと

高寄はて調ふる殊に酒客を惡酒の堪ふを物ふりたり



文布

伊香保道乃記

赤城紀行

漫遊文草

更衣日記

木曾名所圖繪

江戸名所圖繪

上毛志料并圖

上野名跡志

富士見十三州圖

伊香保村誌

伊香保神社縁起

木暮氏舊記

日本地誌提要并圖

熊谷縣一覽表并圖

群馬縣一覽表并圖

熊谷縣一覽表并圖

群馬縣一覽表并圖

伊香保道中記

引書目単



伊香保道中記

東京より上州伊香保に至る行程を凡三十四五里あり日本

橋より西北板橋驛より出で中仙道の上州高崎まで行く

此の間二十八里を官道の驛々ありしが往来繁くして自在に

馬車東京萬世橋の内より日ご多崎人力車馬駕籠を通じし

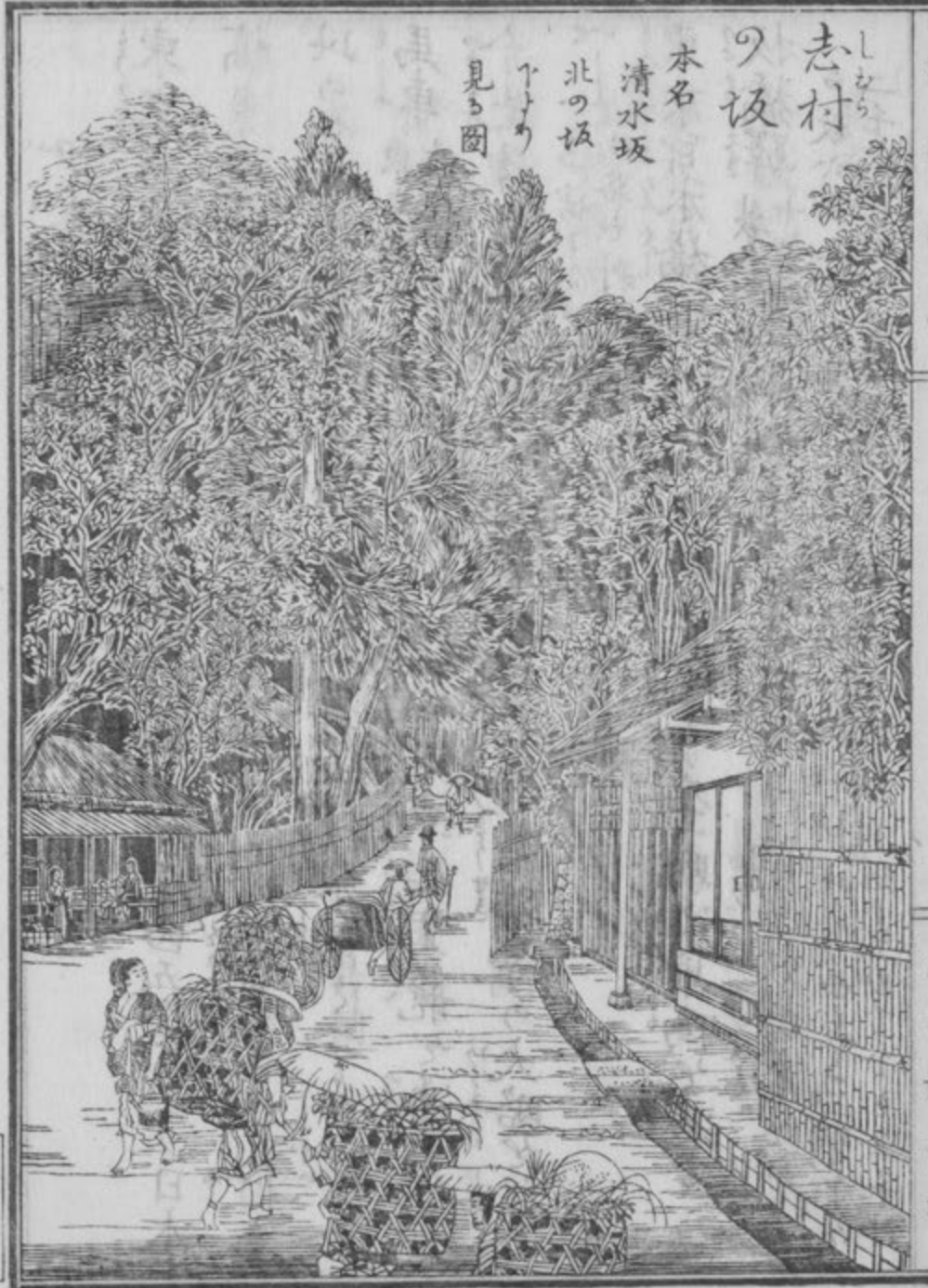
今先その路をたづむる村驛里程名勝舊跡等の大略を記す

べしこの路より伊香保まで

東京日本橋板橋へ二里水郷追分より左へ駒込巢鴨を過ぐ

板橋驛蔵へ二里中仙道の第一驛に酒店妓楼簷を列ぬ

戸数六百五十人口驛中を流る石神井川此より西ある三寶寺の池より出で下を王子村



志村 しむら

本名

清水坂

北の坂

下より

見ゆ

附一

戸田橋 北より見る

戸田川を豊島  
 豆立の郡界と  
 して東京府  
 埼玉縣の管  
 轄境あり  
 戸田橋長さ  
 七十五間  
 明治八年  
 始めて架す  
 橋上の眺望  
 よろし



附ノ二

此川の源を  
 秩父郡の山より  
 出で東南に流  
 ぎ本名を荒川と  
 して豊島川千住  
 川隅田川とさる  
 長さ七十四里



と居る龍神川とふまを小橋と渡き板橋の名多あり起る○  
 千住川入る驛の出口路の傍左側より縁切榎あり今枯きを幹のみ  
 存す祈まど男女の縁と断つと云 ○一里許にして志村の坂のりつり坂を  
 険し○坂より西へ續きたる岡を千葉氏の城趾あり熊野  
 の社あり○坂の崖より清水薬師あり此のを清水多く  
 涌く清水種とて夏大 ○坂のりつり戸田川を二十町作一面の  
 平地を茅原多く風景好し 春の櫻草夏の出 ○戸田川を  
 戸田橋と架す渡をぞ戸田村あり路の左の小高きを坂とす  
 羽黒の社あり榎の樹の又より霊泉出づ  
 蔵驛 東京より四里三十町 驛の東より足利氏の政の關東探題府の  
 半浦和一里九町半

附ノ三

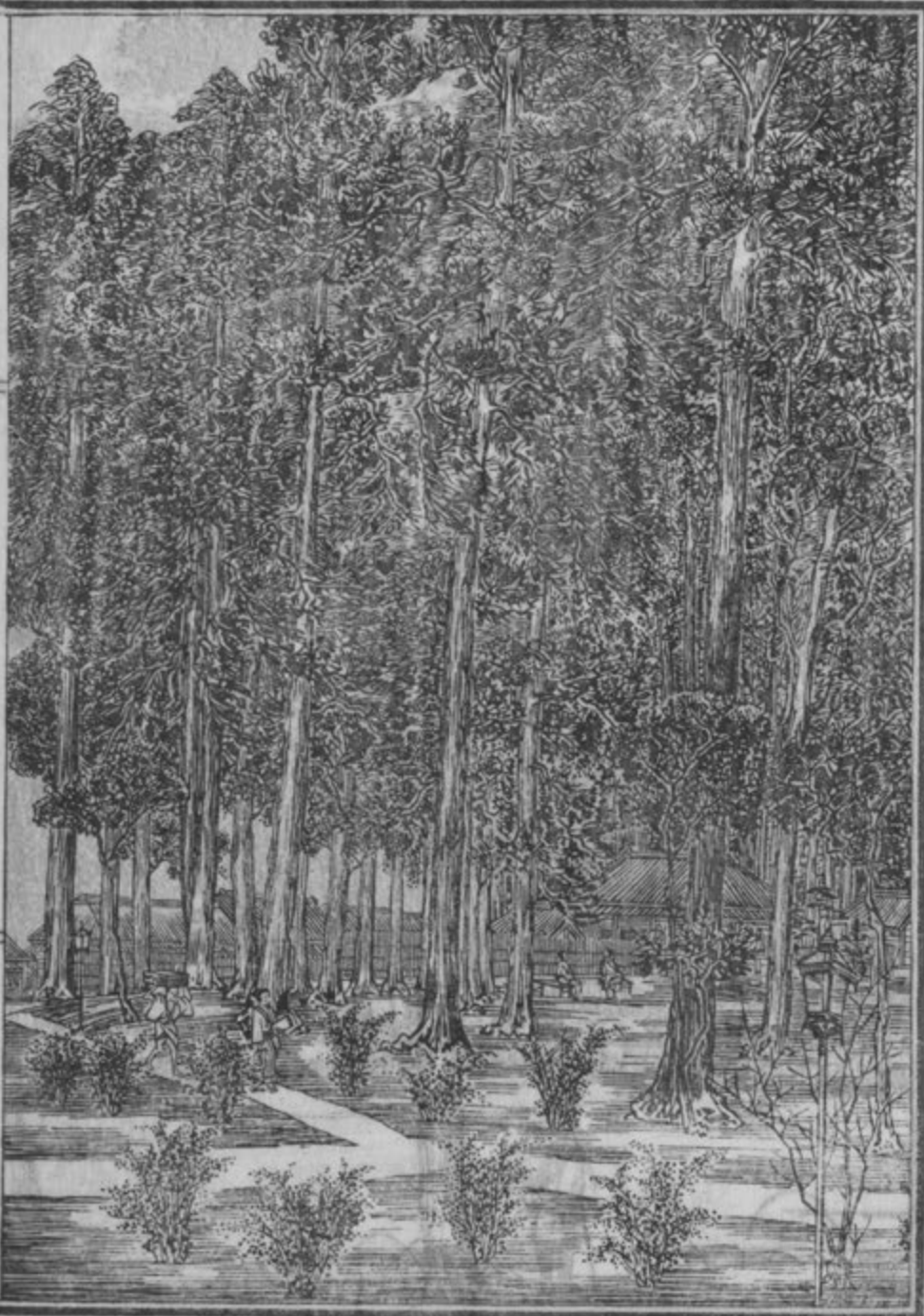
跡あり 澁川左衛門 白幡村の街道より焼米坂あり 焼米と  
 浦和驛 東京より六里四町 驛の入口の右より調の神社あり延喜式内  
 の神あり社地老樹鬱蒼たり今公園とにまき花木を植う  
 博物館あり此驛を埼玉縣廳あり今敷地をその外師範学  
 校熊谷裁判所支廳電信局ありりて賑し 三百八十餘戸 當  
 縣を武藏國十六郡九十餘萬石九十萬四千餘人と管す○  
 一里許行をぞ街道の左右数町の間原あり大宮の原と云  
 中野より六國見やを西北より六ヶ國の山と見えあり  
 大宮驛 東京より七里廿二町 武藏の一の宮あり氷川神社あり  
 の名あり○驛の入口のより大鳥居あり夫より松の並木十八町

調つみの神社

浦和驛の入  
口より延喜  
式内の神は  
境内老樹鬱蒼  
あり今公園  
として多く  
花木を植う



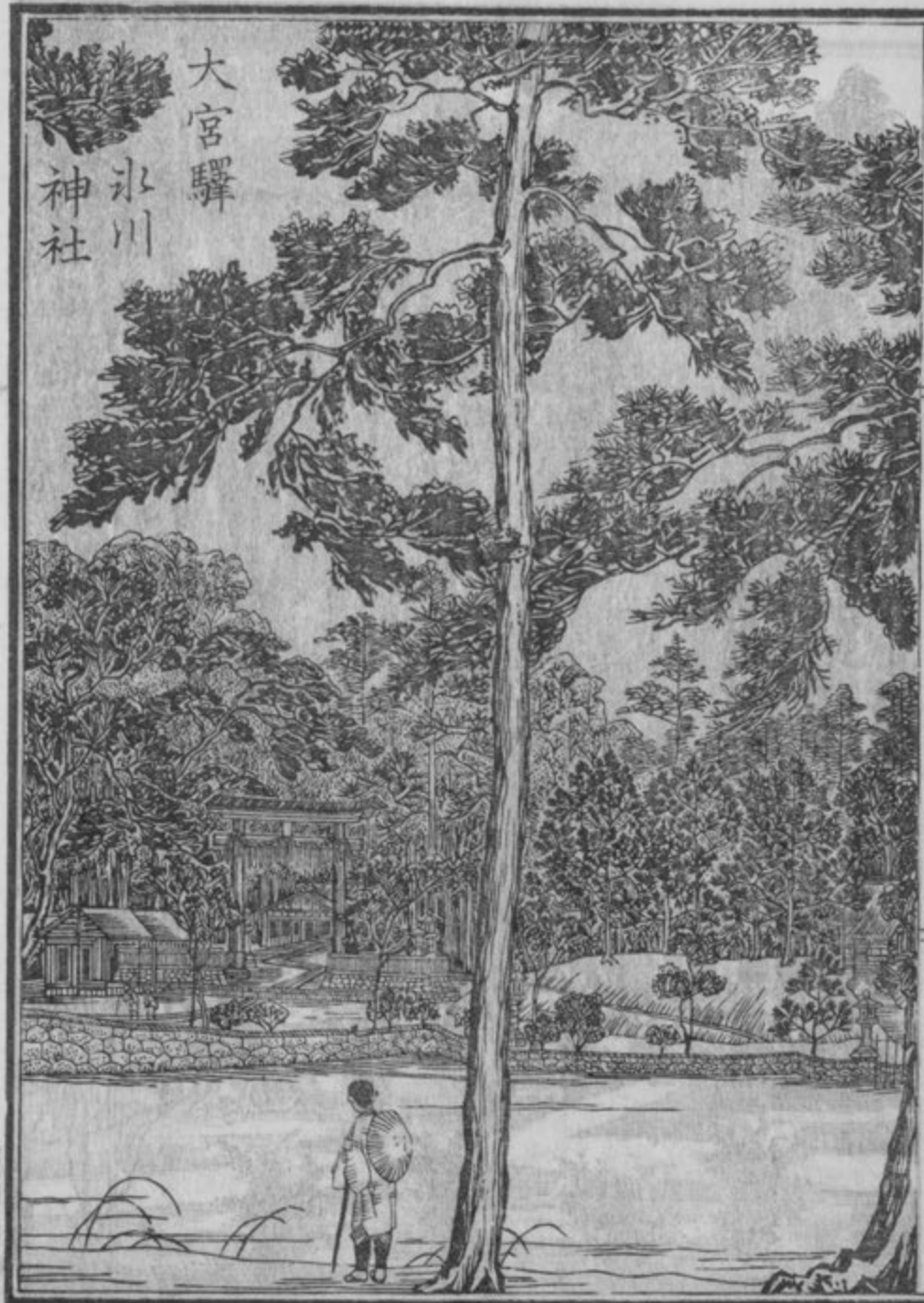
附ノ四





千  
百  
一  
年

六  
百  
一  
十  
年



大宮驛  
氷川  
神社

信  
濃  
縣  
志

六  
百  
一  
十  
年

附  
五



入る氷川神社あり當社を延喜式名神大座此本本篇中卷伊香保神社の

部子まじの神はして孝昭天皇の時二千出雲の簸の川上故云水

杵築乃大社を遷座せしもの日本武尊東征の時當社祈

誓ひり平貞盛が將門退治の時願書と籠め頼朝の神田寄

附もあり徳川家の世を神領三百石官造の社ありを明治元年十月廿七日

今上御參詣りりて今官幣大社に列せり○間の宿天神

橋名物は

上尾驛東京より九里廿三町地子紅花の産りり

桶川驛東京より十里廿四町驛販し驛中子浄念寺浄土

鴻の巣驛東京より十二里廿四町繁華あり七百四十戸宿の中子

附六

浄土宗勝願寺浄土の東十八壇林の一あり○宿より三十町

行き箕田村路の右子八幡宮渡邊の綱が出せの地あり

東京芝三田とるを傍碑あり○右忍行田路二里

○間の宿吹上名物鮎の久下村より熊谷の土手二里

熊谷驛東京より十七里四町半此室茅一繁華の地あり四方七

街道の繼立場より絹綿ありの産物皆此處千集る

十戸四千熊谷裁判所師範分校宿の右側子高城の神

社の式内あり又當地を熊谷次郎直實の舊地にして驛乃

中の右子入蓮生山熊谷寺の直實出家蓮生

稱し開基せし寺安政元年本堂焼失再建ふし

熊谷堤

左に流る荒  
川の堤防は  
此堤千住まで  
連なるこの處  
三十町許の間



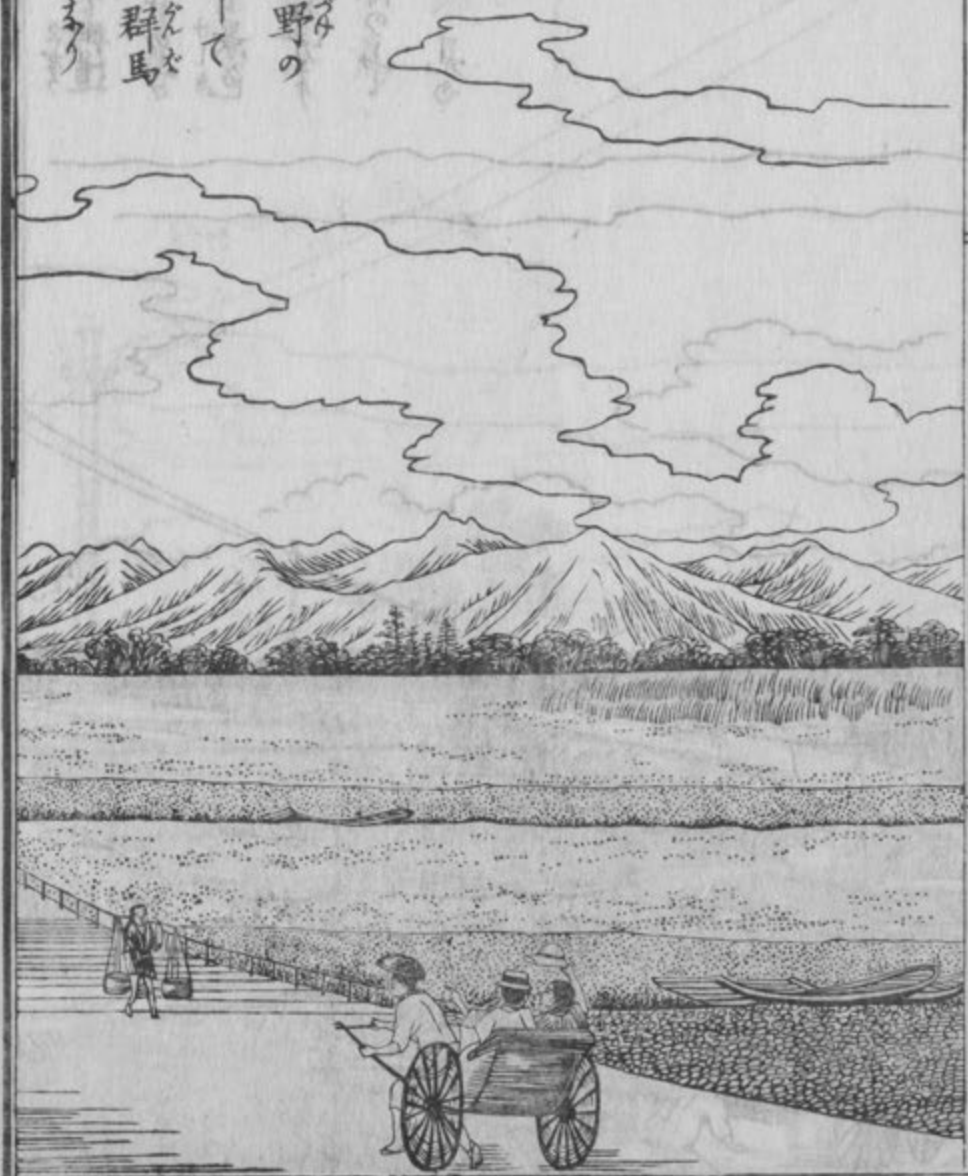
附  
七

堤の上を街道  
と云西北の山々  
と眺め景色  
よめ北の方  
伊香保の山々  
見ゆ



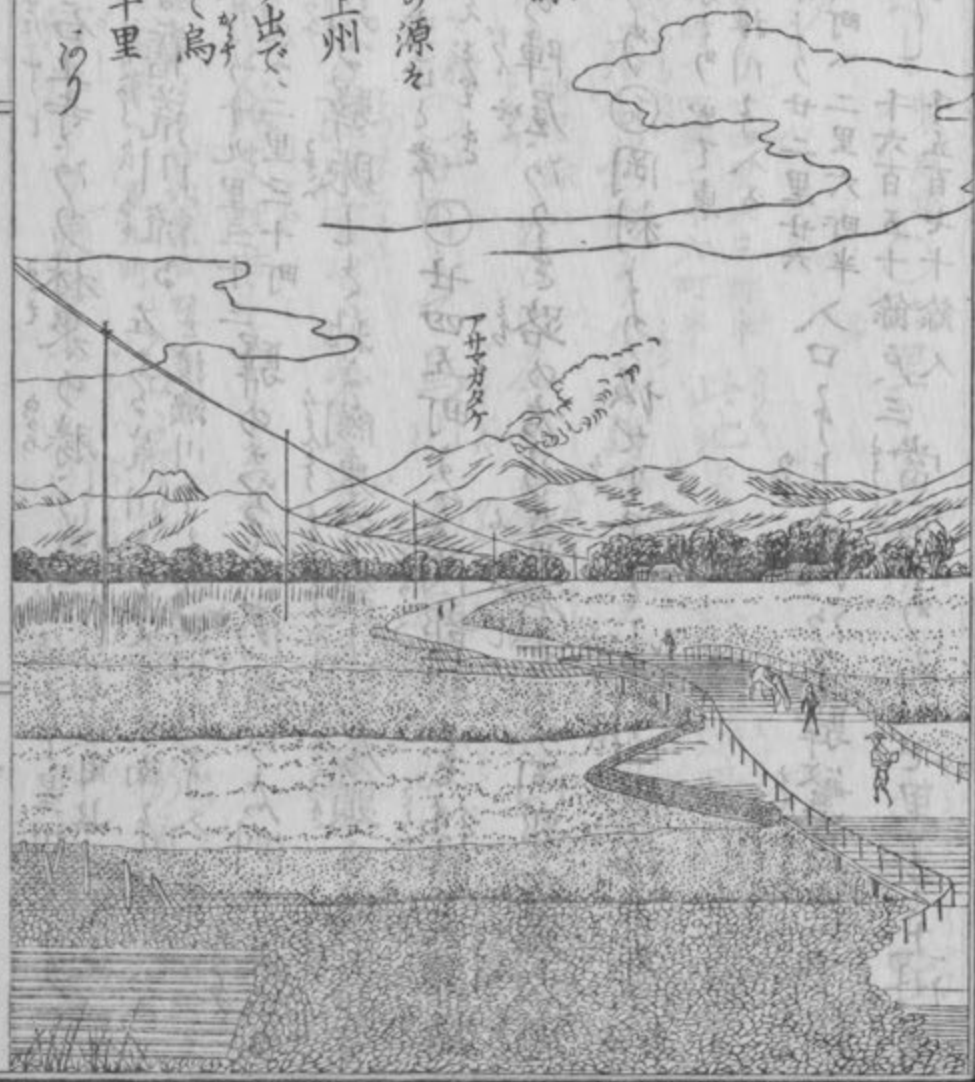
神流川

武蔵上野の  
國境に於て  
埼玉縣群馬  
縣の界あり



附ノ八

常々を水  
多く假橋あり  
此處を天  
正十年小  
田原の北條  
氏直と厩橋前橋  
の瀧川一益との  
古戰場あり川の源を  
これより西ある上州  
甘樂郡の山より出で  
らより東北より鳥  
川より入る長と二十里



又左側より石上寺あり林泉の勝あり水流まき星川とあり○

驛の出口は舊荒川流る左あり荒川を支き東南より流

深谷驛 東京より十九里三十三本庄へ二里三十町驛のナリと御道の右側より大木の

杉の並木あり驛賑しと北は瀧東管領山内房頭の城跡あり

川越の扇谷定正と常子戦争絶えざるま○廿四五町より岡部村を往時安部攝

津守 二萬の陣屋あり路の右乃普濟寺あり岡部六彌太忠

澄の墓あり○岡村より坂せり小山川假橋あり西

秩父郡の界より出て東

本庄驛 東京より廿二里廿六町新町へ二里六町半入口より上り坂あり驛繁昌は絹

縞の産多し千六百五十餘戸三當宿ありぬへ七里より上州富

附九

岡子至るし製紙場二里より神流川あり武藏上野乃

國界あり

新町驛 東京より廿四里廿三町半倉賀野へ一里二十六町半此地より上野國緑野郡あり驛を

苗木新町落合新町より分る路中全鑽神社あり又前橋へ

馬車路あり四里餘 出口の左より屑糸紡績所あり器械巧妙

あり屑糸七精 ○廿町より烏川あり○川は渡せど岩鼻村

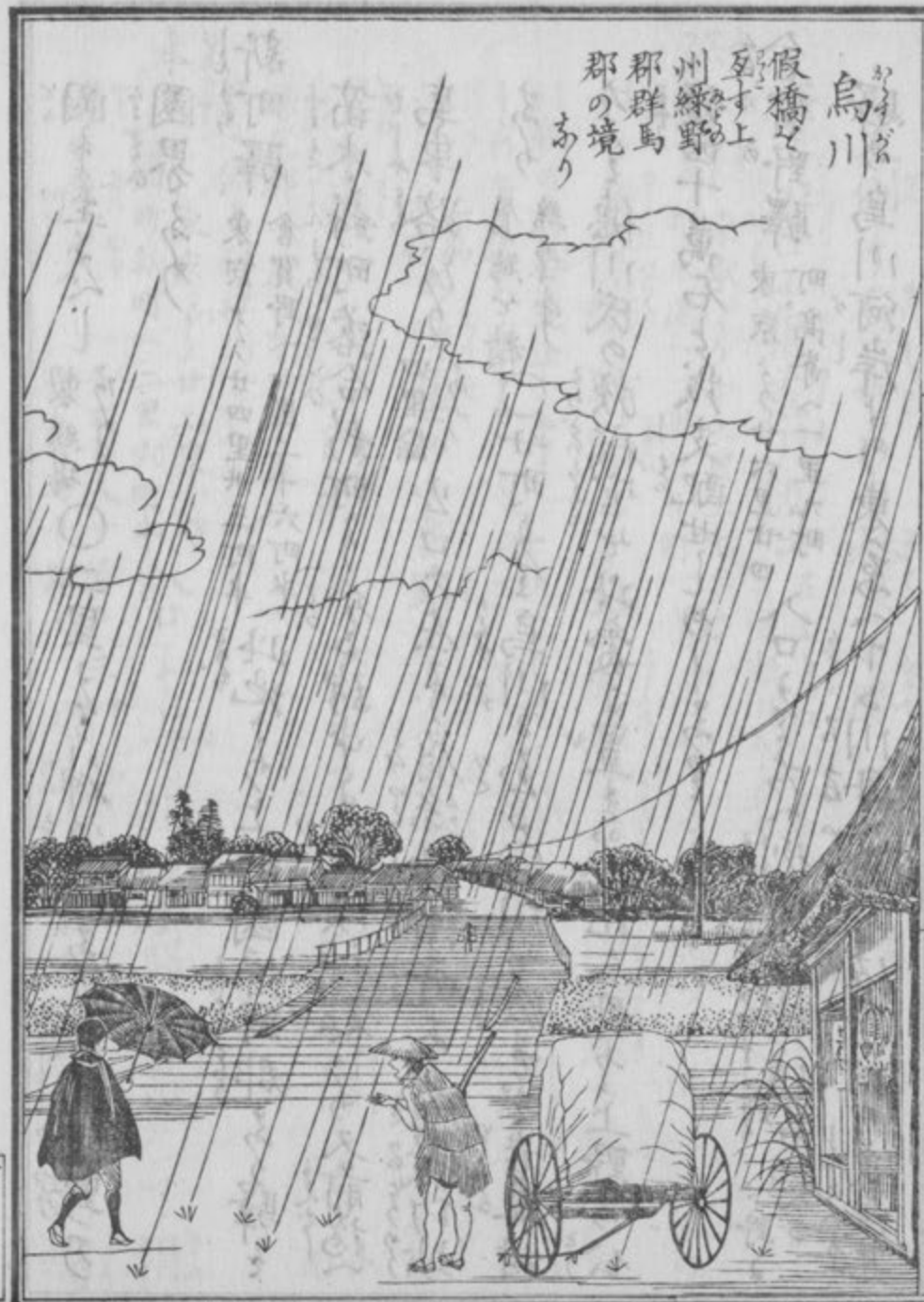
を徳川氏の次代官と此處に置き武蔵六郡より上野の公

領四十萬石と成支配せしめあり

倉賀野驛 東京より廿六里廿四町高寄へ一里九町入口より右へ例幣使御道分る下野の

驛の烏川河岸より東より下り川舟出づ○佐野村を萬葉集

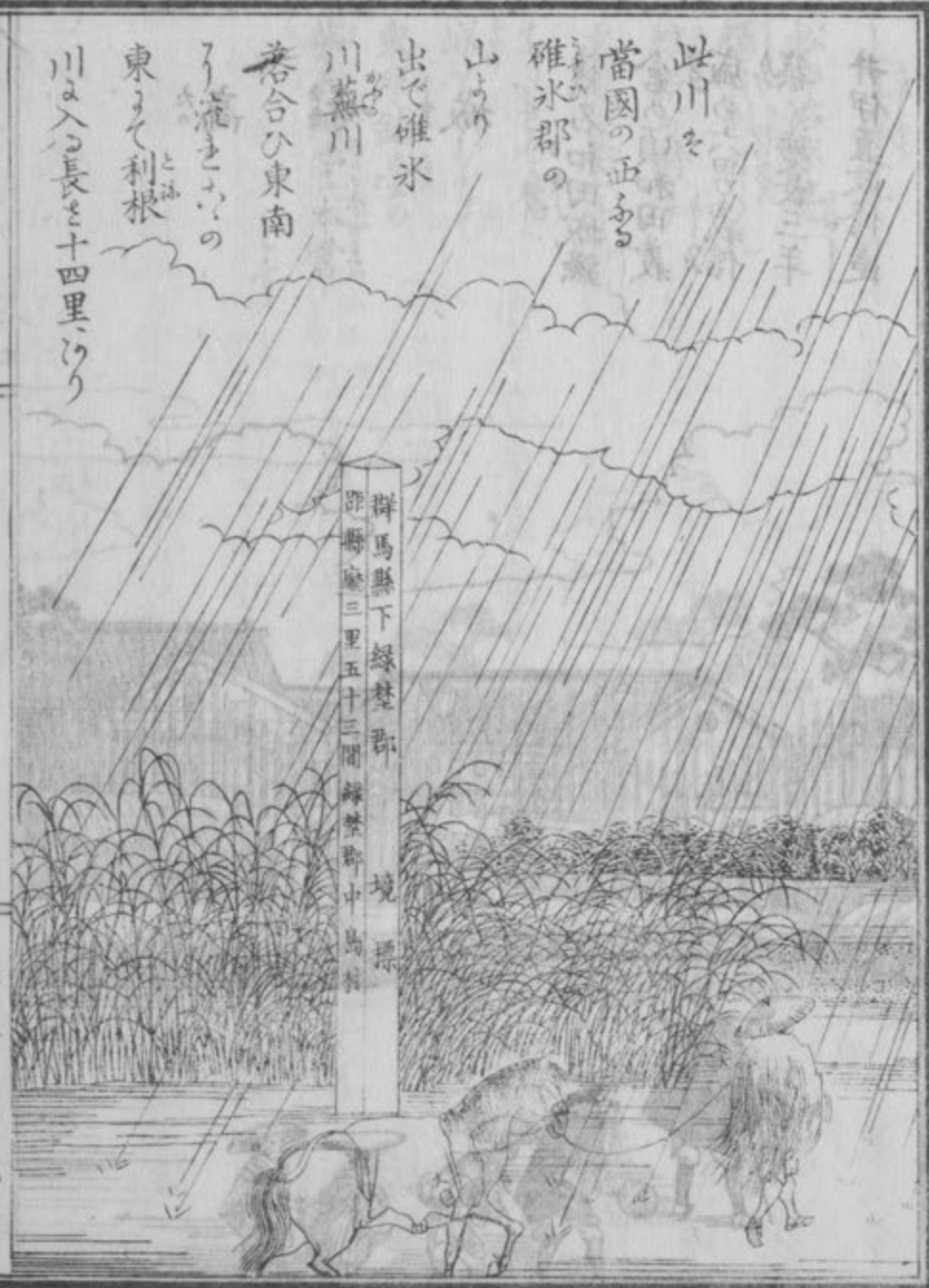
烏川  
假橋  
至  
州  
郡  
郡  
の境  
あり



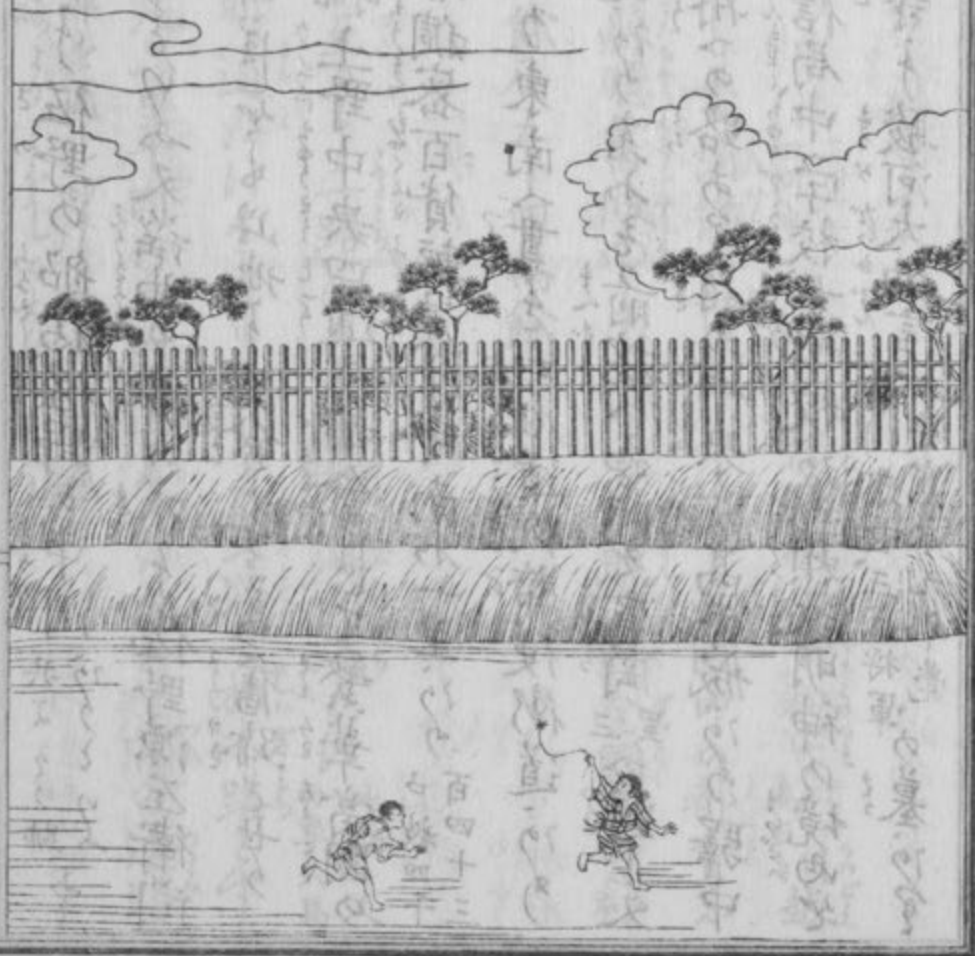
附ノ十

此川を  
當國の西より  
碓氷郡の  
山より  
出て碓氷  
川  
若合ひ東南  
より流るるの  
東より利根  
川は入る長と十四里あり

群馬縣下緑野郡  
碓氷郡  
境



享保三年より  
 松平右京亮  
 輝貞封せしれ  
 維新の時より  
 至る八萬二千石  
 ありき今舊  
 城とてなりて  
 東京鎮臺の  
 第三師管本營  
 とす



高崎城  
 舊名和田城鎌  
 倉の頃和田義  
 盛の六男義信  
 築く慶長三年  
 井伊直政修造



以下代々の歌集より佐野の船橋、佐野の中川、共よその跡を  
承るる舊地ありとて又謡曲の録の木より佐野源左衛門  
恒世の事を作しやも此地より附會してその舊跡とせり

高崎驛

東京より廿七里三十三町

上野中央四通の都會はして繁華當國の

第一あり市店稠密百貨輻湊す町南に一里のり戸數四千

戸人口一萬六千百十五人西より東南へ貫き中仙道例幣使街道のり

北より三國街道のり南を前橋へ西南を富岡三へ通じ又

西より草津信州への路あり驛の中央より高崎城のり驛中

より區裁判所電信局中学校女學校のり頼政明神の境内と

公園あり大心寺より駿河大納言の墓あり  
徳川忠長三代將軍の墓あり  
慶寛永九年薨

附ノ十二

その外安國寺あり社寺多し

○前橋を高崎の東北二里十のり往対松平大和守十一里越

より後を城せし處絹織の市盛なり亦國中の都會な

り人口一萬二千三百餘人群馬縣廳舊城ありりりて本縣上野全國十四郡

を管す六十三萬餘石五十四萬餘口あり

伊香保路

高崎より伊香保に至る二路あり本道は澁川路と云  
此路ハ人カ車又馬

車でも通凡七里廿三町道好けきやも遠し又支路を柏木路と云

坂谷嶮し久しども凡六里十町に路近ありはしき常の通路

とせり此路を人力車を通じびり馬或ハ駕籠の  
用意してよりとわしやとひりせし

高崎

金古野へ二里廿四町柏木村へ三里

高崎より路北へ折る三國街道へ出づきを前を

左より榛名めし右より赤城山中より持山せ見ると風景宜し

小鳥村を路分る

○澁川路

小鳥村より尚本道残行

金子驛 澁川へ二里 又一里行

金子驛

澁川へ二里

又一里行

北下村を路分る小坂路

有馬村を和名抄郷

名を見ゆ又當村より若伊賀保

○柏木路

小鳥村より左より入る路狭く

次方よりし井出村を和名

抄郷名より出づ本郷より又行

山より

柏木村 水澤村 本名柏木澤より

山腹にして茶屋より此より

神社より湯の上村より冷鏡

泉より 何きし本郷

澁川驛

伊香保へ

真光寺より

足利の族澁川義頭の子

より東南より前橋路三里

本道より左へ伊香保路

入る次第より山より御野立の松

を路の左より

地藏河原 石地蔵

此處より坂路十町登り伊香保に至る

常に山の麓を行くより山谷

多し一里より茶屋林と云ふ

茶屋より路の左より船尾山寺

つ瀧の澤 共一本郷を過ぐ

水澤村 伊香保へ 茶屋より村の西の

山より水澤観音の境内を過ぎ

行くとより水澤山寺

黒澤より小谷三ツ四ツより





伊香保

温泉

温泉

温泉

伊香保

伊香保

伊香保志上巻目録

上目単

伊香保志上巻

東都 秋萍居士 輯

伊香保名義

伊香保の地名を萬葉集の上野歌子出でたるを最舊とし

や七その外續日本後紀三代實録延喜式にも出でたるその文字

を伊加保 萬葉集延喜式神名 伊香保伊可保伊可抱伊香抱萬葉集伊賀保

續日本後紀三代實録上野國神名帳名の神名 等種こり記せり且その指せり地も今を

僅に温泉一村と云れども往古を以て國の中央ある群馬

郡の西北より連なる今の榛名山相馬が嶽船尾山二ツ嶽水澤

山など呼べる一帶の山々周二十餘里の麓を以て今をこれと

山と稱 おをうと 伊加保嶺と言ひしは論はしは萬葉集  
 小伊香保嶺の雷まを雪といひしは大山より吹き起る風  
 ありバ伊加保風といひ或は伊可保の雨雲まを虹まといひ  
 集中歌もいと多くつらむも知らむといふ今狭き地名よ  
 つまなくかくと言ふべけんや又今の榛名の山中より沼を即  
 萬葉集以下中古の歌集より多く伊加保の沼と詠みしは  
 ありとも思ふべし且或人の説より伊加保といへる名義もよりの  
 大山殊平國の直中より得るとて嚴く大と秀でたるより嚴秀の  
 意ありべしといへる當ま 高平穂乃山を保とて 又その昔朝廷  
 より國々の神社の格と定め給ひし時もその大山より座を伊加

上ノ一

保の神ありバ まがら 名神大座 この事申卷伊香保 の神に定め  
 られけの後世地名も移り愛多より至りてその神の座を地  
 のみより つまなく 伊香保の名乃 或説は 残置しあるべし 伊加保  
 を湯川の つらむ ありとあるを 後 の狭き地名より つまなく の考あり 又村より  
 東南有馬村水澤村より若伊賀保小伊賀保を 伊香保の名と負へる神  
 まどこれより古を伊香 今温泉 なる地を初としよりの伊加保嶺  
 保の名の廣きを知りし 今温泉 なる地を初としよりの伊加保嶺  
 の山の地理名勝旧跡古事温泉等の事を記し 伊香保志 作す

伊香保村

當村を上野の國群馬郡の西北ある連山の東北の麓より南  
 市街より地を上山といへる峻き山の中腹の側崖より南  
 より山を負ひ西を谷小臨み前を正北より稍東より向ひて

伊香保町全景 東面

攀上香山路幾回  
温湯沸處一村開  
嵐煙亂入樓々晚  
多少游人託病來

磐溪

樓臺高架

白雲造

不是禪拙

不是仙

又見化工

多妙用

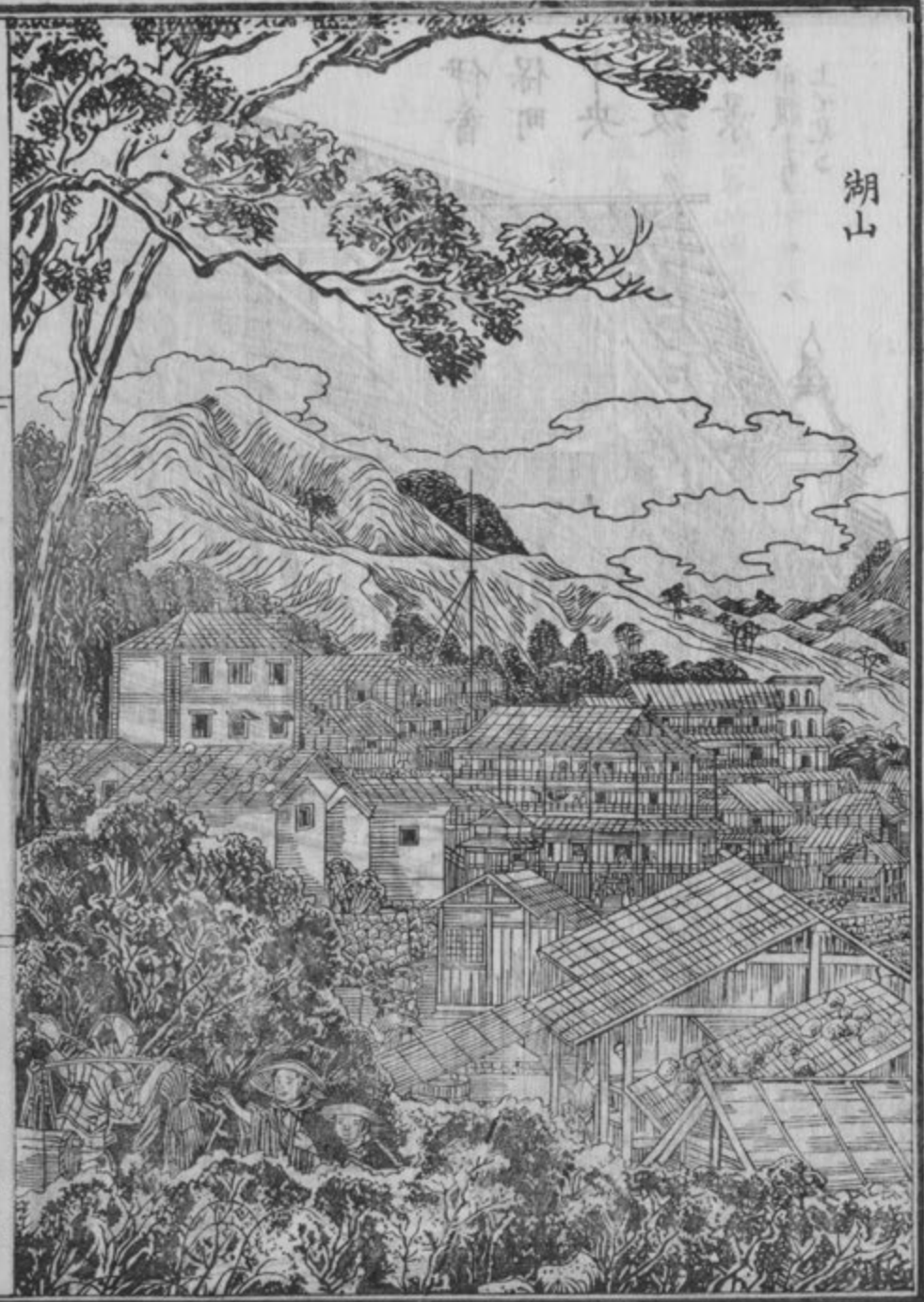
一村奇福

一條泉



上ノ二

湖山

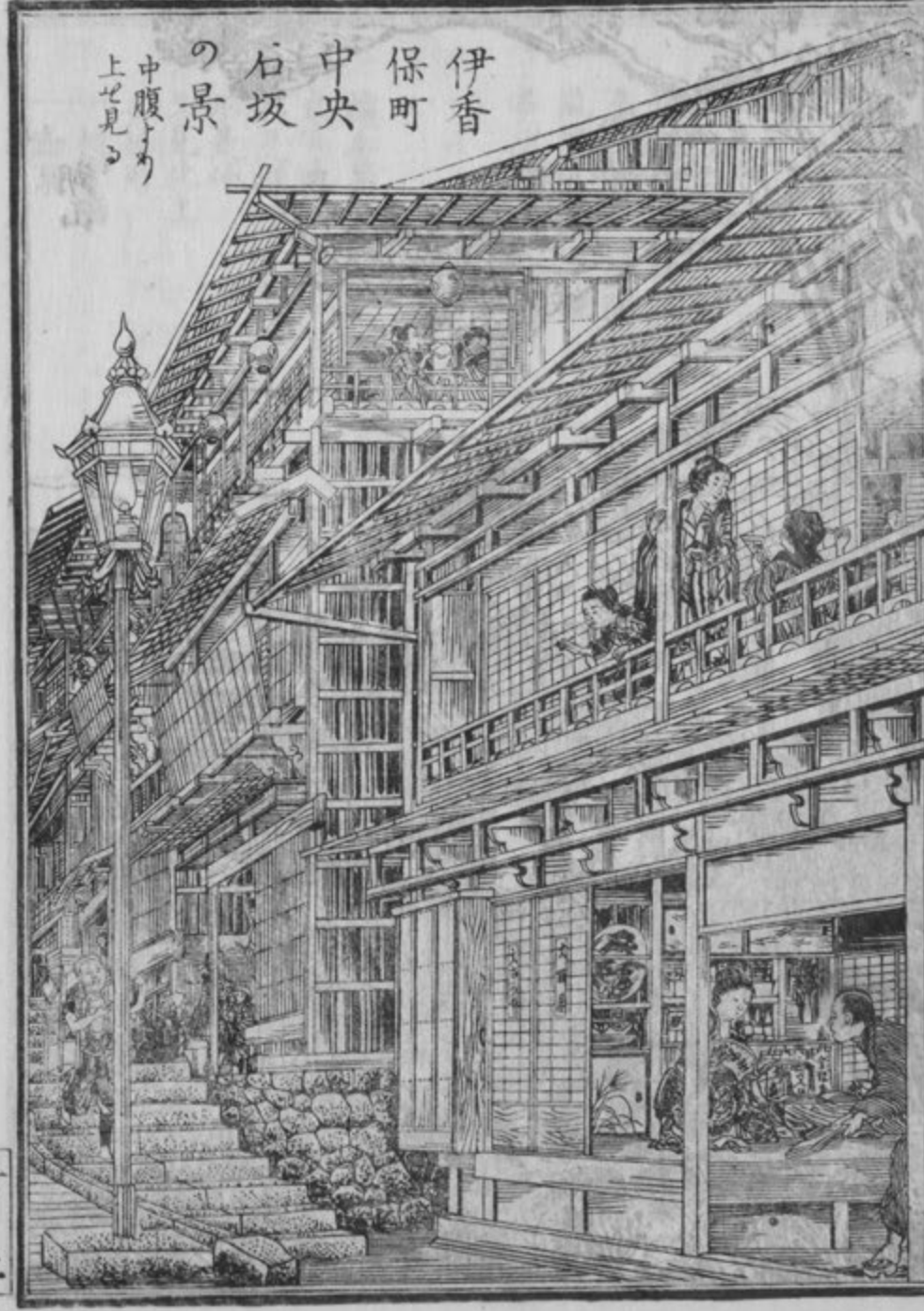




樓閣參差倚半天  
 四來浴客此留連  
 斷崖無地容耒耜  
 一脈溫泉是福田

中州

八十四



伊香保町中央石坂の景  
 中腹より  
 上を見

上ノ三

人家を崖とぐり石垣を疊み宅地と故に家をの屋乃棟を一層を一層とあり其状階梯の如し此人家の族は地の字を香湯と云ひ北緯三十六度三十分東京西経零度四十九分 緯度東経百三十八度五十七分三十分 市街東西三町南北四町棟數凡四五百 皆明治十一年春市中巻く一町の中央に一條の坂路を閉き石段を疊み河が人家左右に建ち並び外裏町も一町ありをんで上町下町の稱あり 町の最上と最下とを温泉を町より八町わじ山の背にあり 寛く導き来りて家へ引きて内湯といふ 湯桶の事を併て次 此處の地勢海面より高きこと凡二千六百尺 日光より高き五百尺 山間雲嵐の中にてありて常

上ノ四

子風多し且冬を寒氣甚しけれ 家居を塙野屋皆皆板を用ふる然れども夏を空氣甚清涼よし極暑なるも尚華氏の寒暖計 泉の部は脱けり 八十度より昇ること少く 朝夕凡浴治最功能なるのみありて 清鮮の空氣人體を遠ひ且暑を避るとりて宜しと又東京よりも程遠くこれと夏を都鄙の貴賤外國の人をも浴するもの甚多と其の盛なるを一時に凡四五千人の客必し輻湊して浴館各三層四層の巨樓を作り皆數十の客室とありて 壺を設ちりとも家にて殆ど空室なきに至り一年の浴客を算すれば大凡三四万人 三四年來の夥しき不及と云ふ 客の來ること四月より外

予酒肆妓樓雜高鋪演劇落吐等の場俱予簇りて崖予據  
 予笑悟弦歌を閑泉幽禽の聲々相和して日夜絶えん実  
 山谷間ある壺天の一熱境あり

当地より諸方への里程を左の如し郵便局、いわて四月より九月  
 休日を以て音信を諸方へ出せり  
 十月より三月迄ハ隔日よかた

- 水澤村 東南一里十町
- 前橋 東南六里
- 四萬温泉 西南九里
- 高崎 東南六里
- 草津温泉 西南三里
- 澁川驛 東二里七町
- 榛名山 西南二里半
- 東京 東南三十四里

當村の幅員を東西二十町餘、南北四十町餘、東を當村と他の六  
 箇村との入會秣場と界し南も他の十八箇村との入會秣場と



市街

東西三町南北四町  
 北緯三十六度三十分  
 東經零度四十九分

明治十二年夏

戸數百六十六  
 人口六百五十九

伊香保町全圖

東京  
前橋  
高橋  
總本  
路

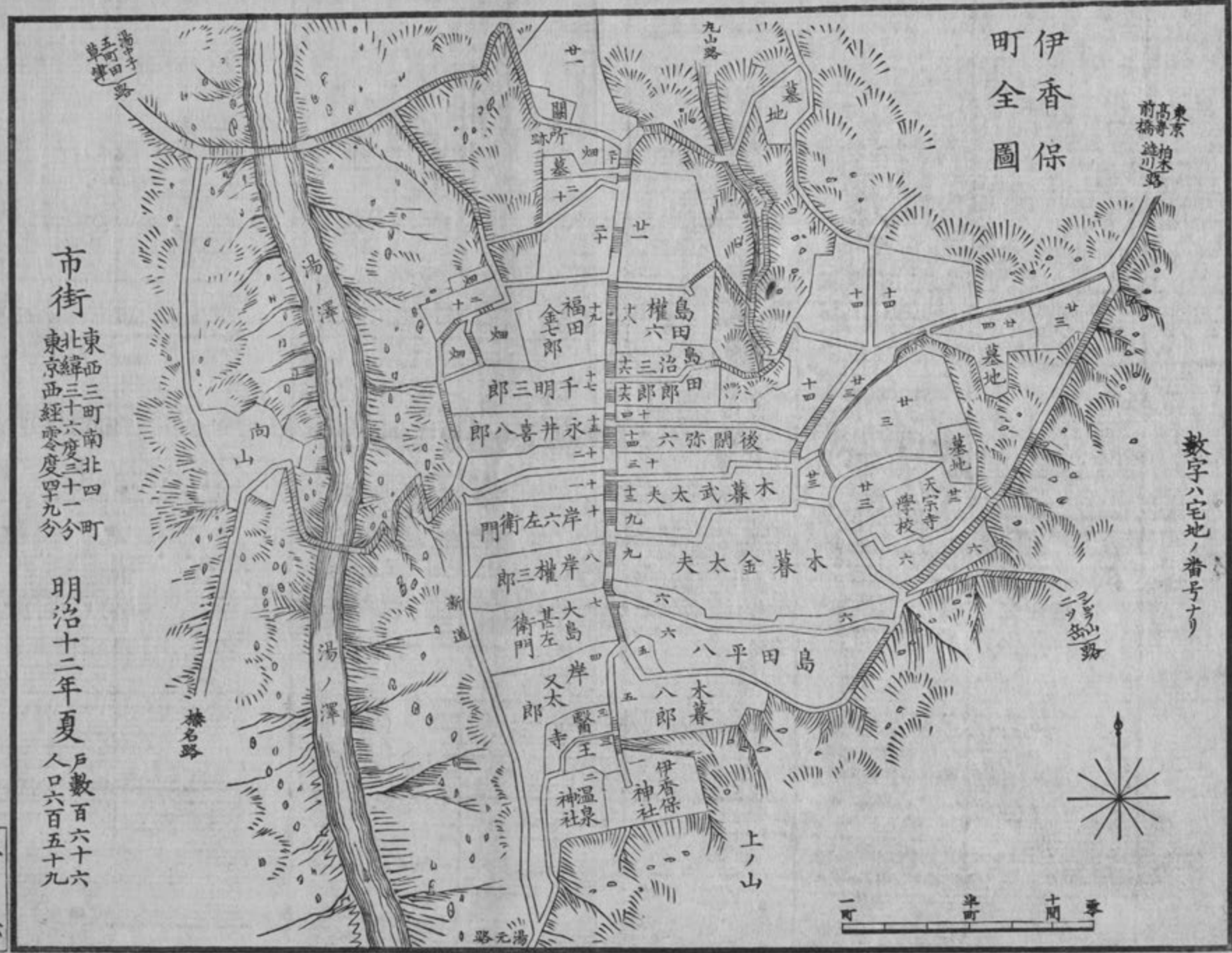
市街

東三町南北四町  
西三町南北四町  
東京經度三十一分  
西經度九分

明治十二年夏

戶數百六十六  
人口六百五十九

数字ハ宅地ノ番号ナリ





伊香保町全圖



る上平二ツ岳<sup>うみのひら</sup>二ツ岳<sup>ふたつだけ</sup>境<sup>まゝ</sup>し、西<sup>にし</sup>を春名村<sup>はるなむら</sup>子<sup>こ</sup>、北<sup>きた</sup>を湯中<sup>ゆなかつ</sup>子<sup>こ</sup>村<sup>むら</sup>、祖母<sup>そぼ</sup>

島村<sup>しまむら</sup>子<sup>こ</sup>隣<sup>とな</sup>る、一村<sup>いちむら</sup>の地<sup>ち</sup>大<sup>おほ</sup>抵<sup>た</sup>山<sup>やま</sup>腹<sup>はら</sup>の陵<sup>りやう</sup>谷<sup>や</sup>より平<sup>ひら</sup>地<sup>ち</sup>少<sup>すく</sup>く地<sup>ち</sup>

質<sup>ち</sup>黒<sup>くろ</sup>くし<sup>くし</sup>く、砂<sup>すな</sup>土<sup>つち</sup>浮<sup>う</sup>石<sup>いし</sup>と雜<sup>まじ</sup>り礮<sup>げう</sup>碓<sup>すい</sup>に<sup>に</sup>く水利<sup>すいり</sup>よく村民<sup>そんじん</sup>を香<sup>かう</sup>

湯<sup>ゆ</sup>の一<sup>いつ</sup>處<sup>ところ</sup>子<sup>こ</sup>集<sup>あ</sup>り往<sup>むか</sup>古<sup>こ</sup>を皆<sup>みな</sup>農<sup>のう</sup>事<sup>じ</sup>あり今<sup>いま</sup>を大<sup>おほ</sup>抵<sup>た</sup>浴<sup>ゆ</sup>館<sup>かん</sup>を業<sup>ごう</sup>

少<sup>すく</sup>し又<sup>また</sup>を雜<sup>まじ</sup>種<sup>しゆ</sup>の商<sup>しょう</sup>とあり今<sup>いま</sup>一村<sup>いちむら</sup>の畠<sup>はら</sup>地<sup>ち</sup>四<sup>よ</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>町<sup>ちやう</sup>步<sup>ぶ</sup>内<sup>うち</sup>宅<sup>たく</sup>地<sup>ち</sup>三<sup>さん</sup>

山林<sup>さんりん</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひやく</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>町<sup>ちやう</sup>步<sup>ぶ</sup>家<sup>け</sup>数<sup>すう</sup>百<sup>ひやく</sup>六<sup>ろく</sup>十<sup>じゆ</sup>軒<sup>けん</sup>入<sup>にん</sup>別<sup>べつ</sup>六<sup>ろく</sup>百<sup>ひやく</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>九<sup>きゆう</sup>人<sup>にん</sup>あり明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>

年<sup>ねん</sup>夏<sup>げ</sup>の潤<sup>うる</sup>あり戸<sup>こ</sup>数<sup>すう</sup>日<sup>にち</sup>を社<sup>しゃ</sup>寺<sup>じ</sup>役<sup>やく</sup>場<sup>ばう</sup>近<sup>きん</sup>年<sup>ねん</sup>當<sup>たう</sup>地<sup>ち</sup>の繁<sup>はん</sup>昌<sup>ちやう</sup>年<sup>ねん</sup>子<sup>こ</sup>加<sup>か</sup>り

宅<sup>たく</sup>地<sup>ち</sup>の地<sup>ち</sup>價<sup>げ</sup>一<sup>いつ</sup>等<sup>とう</sup>ありを一段<sup>いつたん</sup>三<sup>さん</sup>百<sup>ひやく</sup>坪<sup>へい</sup>より五百<sup>ごひやく</sup>廿<sup>じふ</sup>五<sup>ご</sup>圓<sup>えん</sup>の貴<sup>たか</sup>

まより至<sup>いた</sup>り當<sup>たう</sup>縣<sup>けん</sup>下<sup>げ</sup>りて地<sup>ち</sup>價<sup>げ</sup>の貴<sup>たか</sup>きを高<sup>たか</sup>又<sup>また</sup>浴<sup>ゆ</sup>店<sup>てん</sup>の高<sup>たか</sup>ふ言<sup>こと</sup>一<sup>いつ</sup>年<sup>ねん</sup>二<sup>に</sup>

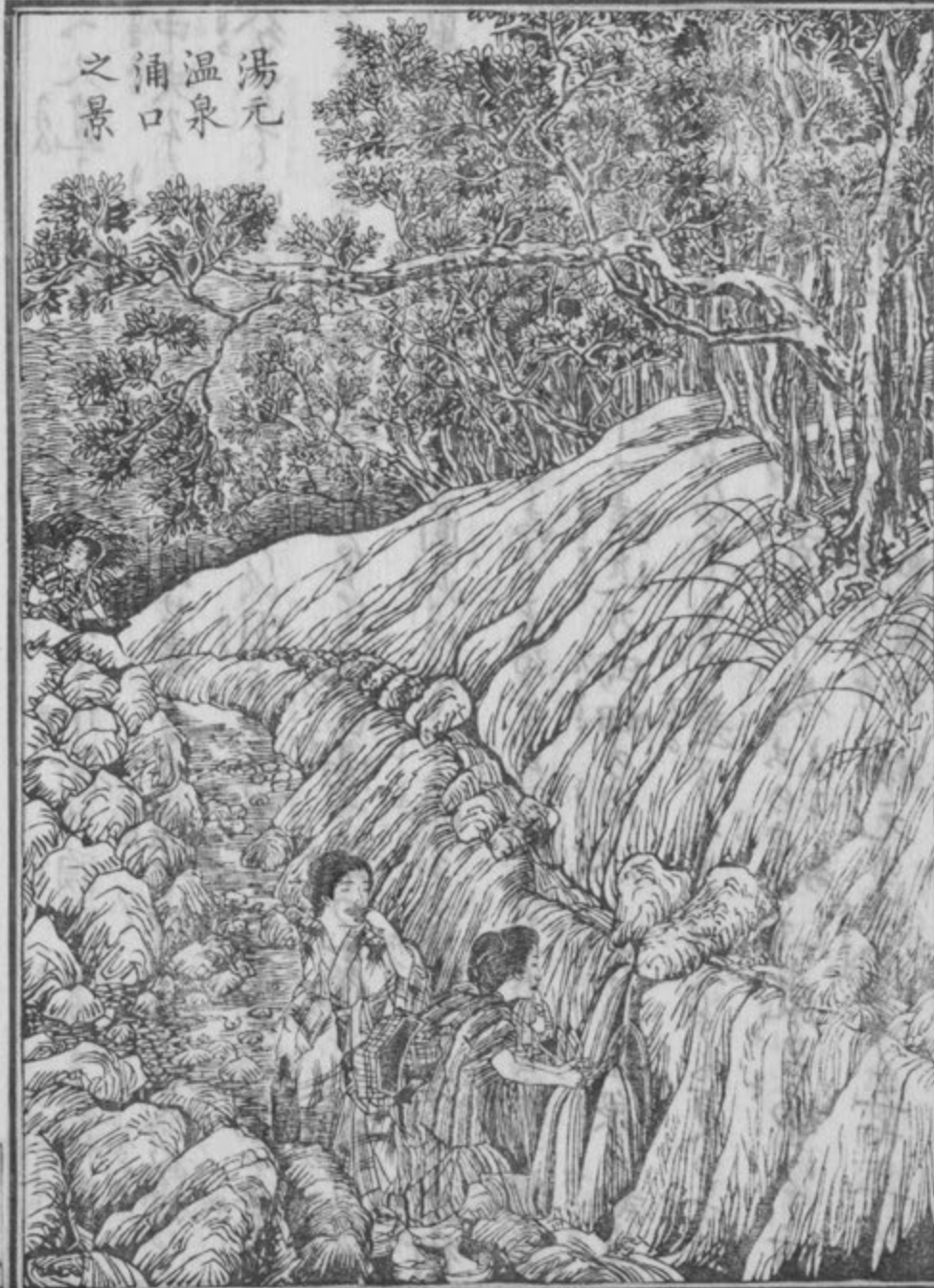
千<sup>せん</sup>五<sup>ご</sup>百<sup>ひやく</sup>圓<sup>えん</sup>以上<sup>いじやう</sup>ありを一等<sup>いつとう</sup>縣<sup>けん</sup>稅<sup>ぜい</sup>十<sup>じゆ</sup>圓<sup>えん</sup>と定<sup>さだ</sup>めらるるといふ當<sup>たう</sup>地<sup>ち</sup>今<sup>いま</sup>

天<sup>てん</sup>緒<sup>しゆ</sup>樓<sup>るう</sup>藏<sup>ざう</sup>辭<sup>じ</sup>





湯元温泉之景



二ツ岳の蒸湯の廢せる頃子造<sup>つ</sup>蒸湯の窟の跡<sup>あ</sup>り熱  
 度の十分<sup>さ</sup>ありぬ<sup>り</sup>や程<sup>わ</sup>よく用<sup>もち</sup>るぬ<sup>り</sup>やありぬ<sup>り</sup>  
 一の温泉の殊<sup>こと</sup>子奇<sup>あ</sup>りときま<sup>ま</sup>きを<sup>を</sup>お<sup>ま</sup>る草木<sup>くさき</sup>の枝<sup>え</sup>乃<sup>し</sup>萎<sup>し</sup>れ  
 たるも<sup>も</sup>も湯<sup>ゆ</sup>子浸<sup>ひ</sup>を時<sup>とき</sup>をた<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>子<sup>子</sup>蕪<sup>そ</sup>生<sup>せい</sup>し<sup>し</sup>或<sup>ある</sup>を<sup>を</sup>鯉<sup>こひ</sup>射<sup>や</sup>金<sup>ぎん</sup>  
 魚<sup>いさな</sup>の類<sup>るい</sup>や湯<sup>ゆ</sup>の中<sup>なか</sup>に畜<sup>う</sup>う<sup>う</sup>子<sup>子</sup>活<sup>い</sup>激<sup>げき</sup>と<sup>と</sup>泳<sup>およ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>體<sup>からだ</sup>肥<sup>こ</sup>え<sup>え</sup>脂<sup>あぶら</sup>づく<sup>く</sup>こと  
 常<sup>つね</sup>の水<sup>みづ</sup>子<sup>こ</sup>勝<sup>まさ</sup>り<sup>り</sup>又<sup>また</sup>餘<sup>あま</sup>る<sup>る</sup>水<sup>みづ</sup>と<sup>と</sup>田<sup>た</sup>圃<sup>ぼ</sup>子<sup>こ</sup>既<sup>すで</sup>に<sup>に</sup>培<sup>やし</sup>養<sup>やう</sup>の<sup>の</sup>功<sup>こう</sup>あり<sup>り</sup>を<sup>を</sup>  
 子<sup>こ</sup>あり<sup>り</sup>され<sup>れ</sup>大<sup>おほ</sup>子<sup>こ</sup>他<sup>た</sup>の<sup>の</sup>温<sup>ぬ</sup>泉<sup>せん</sup>に<sup>に</sup>異<sup>こと</sup>あり<sup>り</sup>所<sup>ところ</sup>あり<sup>り</sup>泉<sup>いづみ</sup>の<sup>の</sup>色<sup>いろ</sup>と<sup>と</sup>源<sup>もと</sup>は<sup>は</sup>透<sup>す</sup>明<sup>めい</sup>  
 せ<sup>せ</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>浴<sup>ゆ</sup>場<sup>ば</sup>ふ<sup>ふ</sup>入<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ば<sup>ば</sup>少<sup>すく</sup>し<sup>し</sup>白<sup>しろ</sup>く<sup>く</sup>濁<sup>にご</sup>る<sup>る</sup>種<sup>たね</sup>の中<sup>なか</sup>の<sup>の</sup>埴<sup>は</sup>土<sup>つち</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>  
 あり<sup>り</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>善<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>味<sup>あじ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>り<sup>り</sup>鹹<sup>しほ</sup>氣<sup>き</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>香<sup>か</sup>臭<sup>くさ</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>源<sup>もと</sup>の<sup>の</sup>涌<sup>も</sup>  
 ても<sup>も</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>鐵<sup>てつ</sup>氣<sup>き</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>  
 風呂<sup>ふろ</sup>場<sup>ば</sup>子<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>失<sup>し</sup>す<sup>す</sup>

上九

凡<sup>かん</sup>温<sup>せん</sup>泉<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>源<sup>げん</sup>泉<sup>せん</sup>敷<sup>しき</sup>地<sup>ち</sup>  
温泉涌と處の地面の稱あり  
 の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>價<sup>げん</sup>を<sup>を</sup>各<sup>かく</sup>縣<sup>けん</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>子<sup>こ</sup>皆<sup>みな</sup>  
 その<sup>その</sup>縣<sup>けん</sup>内<sup>ない</sup>の<sup>の</sup>諸<sup>しよ</sup>温<sup>ぬ</sup>泉<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>位<sup>ゐ</sup>格<sup>かく</sup>と<sup>と</sup>比<sup>ひ</sup>較<sup>かく</sup>平<sup>へい</sup>均<sup>くわん</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>定<sup>さだ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>以<sup>も</sup>  
 然<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>子<sup>こ</sup>關<sup>かん</sup>東<sup>とう</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>伊<sup>い</sup>香<sup>かう</sup>保<sup>ぼ</sup>熱<sup>ねつ</sup>海<sup>かい</sup>箱<sup>しょう</sup>根<sup>こん</sup>を<sup>を</sup>繁<sup>はん</sup>昌<sup>しょう</sup>格<sup>かく</sup>と<sup>と</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>その<sup>その</sup>  
 三<sup>さん</sup>處<sup>ちよ</sup>を<sup>を</sup>相<sup>あ</sup>比<sup>ひ</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>子<sup>こ</sup>定<sup>さだ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>第<sup>だい</sup>一<sup>いつ</sup>熱<sup>ねつ</sup>海<sup>かい</sup>第<sup>だい</sup>二<sup>に</sup>伊<sup>い</sup>香<sup>かう</sup>保<sup>ぼ</sup>第<sup>だい</sup>三<sup>さん</sup>箱<sup>しょう</sup>根<sup>こん</sup>と  
 して<sup>して</sup>云<sup>い</sup>當<sup>たう</sup>地<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>源<sup>げん</sup>泉<sup>せん</sup>敷<sup>しき</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>段<sup>だん</sup>三<sup>さん</sup>百<sup>ひゃく</sup>坪<sup>へい</sup>に<sup>に</sup>付<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>地<sup>ち</sup>價<sup>げん</sup>二<sup>に</sup>萬<sup>まん</sup>九<sup>く</sup>千<sup>せん</sup>圓<sup>えん</sup>  
 の<sup>の</sup>格<sup>かく</sup>位<sup>ゐ</sup>あり<sup>り</sup>や<sup>や</sup>以<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>  
但し當地の源泉敷地を凡十五坪ありと云  
 其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>貴<sup>たか</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>以<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>か<sup>か</sup>  
 く<sup>く</sup>その<sup>その</sup>繁<sup>はん</sup>昌<sup>しょう</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>想<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>遣<sup>や</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>

泉質

近<sup>ちか</sup>き<sup>き</sup>頃<sup>ころ</sup>東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>司<sup>し</sup>藥<sup>やく</sup>場<sup>ばう</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>此<sup>この</sup>地<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>温<sup>ぬ</sup>泉<sup>せん</sup>を<sup>を</sup>分<sup>ぶん</sup>析<sup>せき</sup>し<sup>し</sup>由<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>内<sup>うち</sup>  
 務<sup>む</sup>省<sup>しやう</sup>衛<sup>ゑい</sup>生<sup>せい</sup>局<sup>きよく</sup>の<sup>の</sup>衛<sup>ゑい</sup>生<sup>せい</sup>雜<sup>ざつ</sup>誌<sup>し</sup>才<sup>さい</sup>一<sup>いつ</sup>号<sup>ごう</sup>子<sup>こ</sup>載<sup>たい</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>所<sup>ところ</sup>左<sup>ひだり</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>し<sup>し</sup>

硫酸曹達(芒硝)

〇、六七七五グラム(二分九厘)

硫酸加里(霸王鹽)

痕跡

硫酸マグネシア(舍利鹽)

痕跡

硫酸石灰(石膏)

〇、一一二〇グラム(三厘)

鹽化ナドリュウム(食鹽)

〇、三一五八グラム(八厘五毛)

鹽化カリウム

痕跡

重炭酸石灰(石灰石)

〇、一九八〇グラム(五厘三毛強)

重炭酸マグネシア

〇、一一九〇グラム(三厘九毛)

重炭酸亞酸化鐵

〇、〇〇七一グラム(一毛九弗)

珪酸

〇、〇三五〇グラム(九毛四弗)

上ノ十

總量

一、四六四四グラム(三分九厘五毛強)

右を「リートル」の中ヲ含める分量なりと以テ「リートル」と

を升目の名あり十センチメートル立方をなすを三寸三分三

厘三三三立方に之を華氏の三十九度、二の温度より作る水

の嵩は之を量を凡五合五メ弱重を二百六十又六分六厘六毛

程あり又「グラム」を秤目の名あり「リートル」の千分の一は

重を二分六厘六毛六分六厘六毛を「グラム」に之を左の如し

〇、この位は「グラム」あり

〇、この位は「デシグラム」といふ「グラム」の十分一あり

〇、この位は「センチグラム」といふ「グラム」の百分一あり

右の表の中より硫酸曹達(世硝)なるものに注せるを假し當てたる常の茶名を又「カラム」の下に「何分何厘」などと記せるもその茶を量目に當てて記せるを痕跡といふべしその茶のつらさをしめのみあるを云

功能

衛生雜誌「その温泉成分の中に主とするものを硫酸曹達と

塩化ナトリウムとあれが解凝下泄の機能を有して左の諸病によつてなり

○胃弱 飲食せしめぬ

○白帶下

右の病に之温泉を飲みて効ありと云

○經久悪性癩麻質私

風疾痛風の類の長びきたる病

○腰痛 腰の痛む病

○神経痛 痛む病

○鏡毒より来りたる麻痺

錫鉛毒などかよひの毒より

○皮膚病即麻疹痘瘡より發したる頑癬

疣瘡けしむし

右の諸病よりいづれか之を効あり

○貧血病 血の不且しき色のりをまむる病

○子宮官能變常即月經不調等

婦人のやがりの常

右を飲むも浴するも効あり

又日本温泉獨案内明治十二年 出版一冊 之に書出來て日本諸國

の泉質機能を記せり今他を省きて伊香保の部のま

まぬを以て其の類別を左の表の如くにし

鑛泉

温泉

- 第一 中性泉
- 第二 無氣酸泉
- 第三 有氣酸泉
- 第四 含鹽泉
- 第五 亞硫酸泉

冷泉

- 硫酸鐵泉
- 石膏泉(伊香保泉)
- 酸化マグネシア泉
- 鹽泉

含鹽泉といへる多量の溶塩を成り且少許の炭酸を  
 含める類の温泉の總名に之を又その中に分る石膏泉  
 をいへる伊香保の泉質を當れりと云此石膏泉 即含  
 酸石の質を多少硫酸石灰 即石膏のを含みその味淡として  
 灰泉の質を多少硫酸石灰 事あり  
 石鹼を溶き事かしく且服用すること甚稀に之その機能を  
 皮膚の諸病 收縮の性ありと瘰癧とを宜しやといへり  
 下野那頂の核室肥

上ノ十二

前嬉野武雄并佛國のヒュイトバ  
 リ等の温泉これと同じやといへり  
 此の書を和蘭人ヘールツと

いへる人日本より抄めて著せるものにして前の衛生雜誌

の説と甚異同の参考をばし又同書より伊香保温泉の

熱度を記し之を四十五度や廿九度是を攝氏の寒暖計にて測

するなり攝氏の寒暖計とセルシウスやといへる人の造るる

は佛國より多く用ゐるものありその百度を水の沸騰點

やハ華氏の寒暖計やをフーレンヘイトやといへる人の造るる

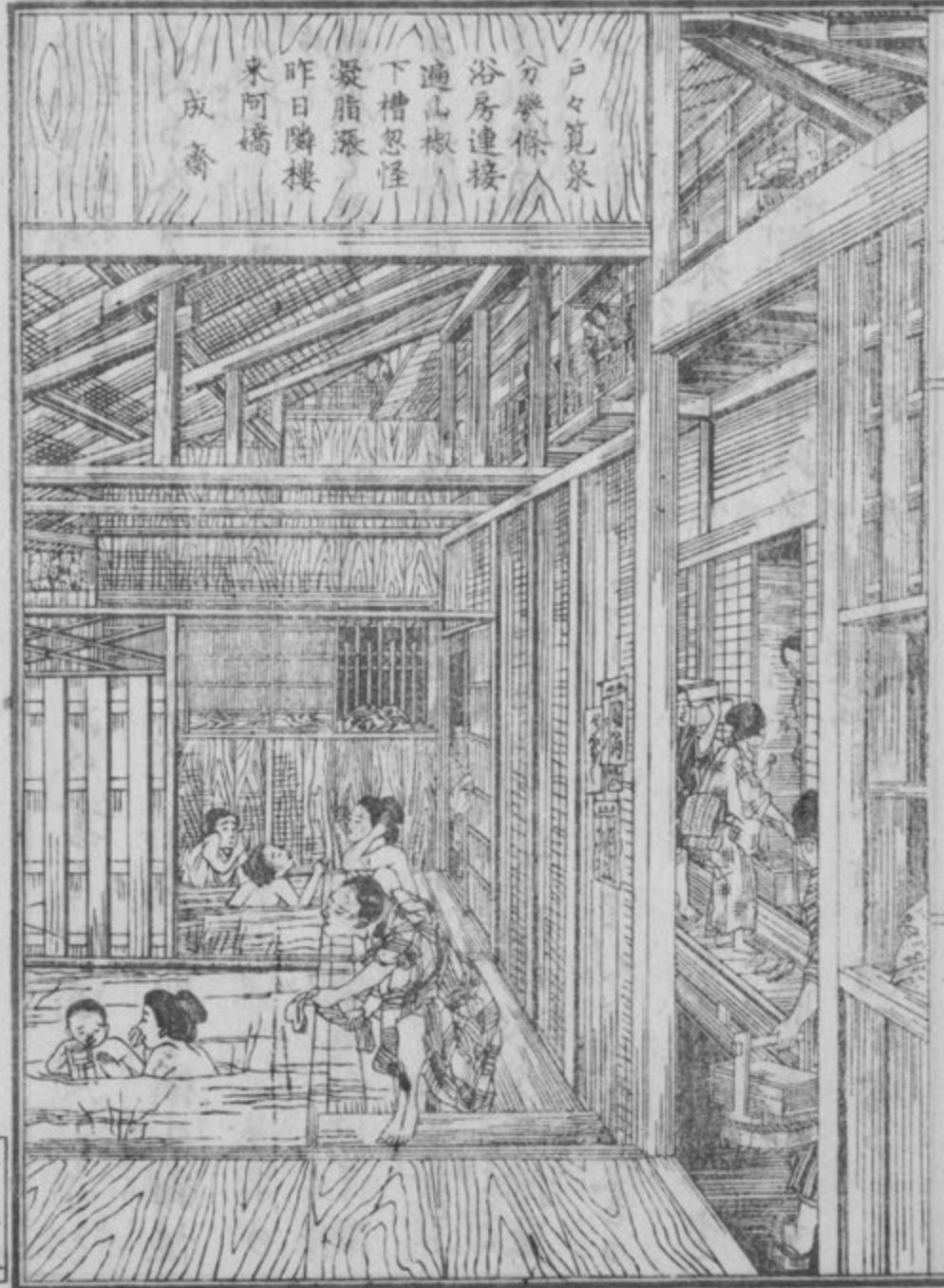
あり英國米國に多く用ゐる是を百八十度を沸騰點を

差れど 三十二度を 攝氏の度より九を乗じ五を除し三十二を

加ふれば華氏と同じ度とある即華氏の百。度より當り  
 百十三度



五十四



戸々窺衆  
分樂條  
浴房連接  
遍山椒  
下槽忽怪  
凝脂派  
昨日隣樓  
來阿橋  
成齋

五十三





上ノ十四

男兒山接抱  
兒峯人說靈  
泉治子宮絃  
索聲收烟月  
暗何樓半夜  
夢蘆熊  
鞭後宇主人

小野子山



湯治の心得

温泉に入ると病を治むることとよめ醫業に次ぐといへ  
 ども温泉の質よりよるを諸病に功能異あり伊香保温泉の  
 泉質功能を前々挙げたるが如し良醫に就きて問ひ善く  
 その病に違ふや否とを考ふべし然して入浴するの法も  
 亦安んずれば却て害あり依て衛生雜誌その他諸書の意  
 を集めて左に其心得を記す  
 湯治を一年四時共々宜し浴する温度を病癒よりよるを掃ふ  
 甚熱きを用ふることも少く大抵を華氏の九十八度乃至百  
 度を定度とて又そのつとあれより過ぎたわとも常の水を

注ぎて湯を冷し入るとし○湯治をべき時日一定  
 しごとしといふ凡三週二十一日を通例の期限とし尚病  
 長短又長病の者の少く病を根治せんやとる者と毎年程と  
 き時候より至るがごとく湯治するを宜しや入浴数日に  
 病の烈しくあること一つもその愛症の後却て快業に赴  
 くとこと一つめ心得てつとべし又短くも一週の間を一處の温泉  
 を試むべしとて湯治を月日を懸て功能つらものと知る  
 べし○浴する度数を年々の人を一日より二三度小限を志人  
 小兒と虚弱なる人を一日より一度と定むべし度に入らば程功能  
 づらべしと思ふを大なる誤はを却て害ありと知ふし入

湯の時刻を朝夕を宜しや夜又湯に入居る間も十分あり  
 十五分まであらずし但し微温の湯多れば十分分までとし  
 ○湯を飲む病によりて分量を差たりといふも大抵一度  
 一盃凡五より四五盃止まらずし是ま決して多く飲む  
 べし但し朝飯前と午後の空腹より二度飲むべし且熱湯  
 を宜しうべし又一度多量飲まんとするときは一盃の間は  
 まるゝを止し運動しを凌ぎ又飲むべし一度に續けて飲めば吐  
 氣を催す事ありし又飲む湯を湯元の涌口へ至り汲り取  
 て用ふるべし○湯を飲み又を湯に入居る後凡一時間を過  
 ぎれば飲食をせしむべし又飲食の後を一時間と過ぎざれば湯を

入る又湯を飲むべし

入浴の心得を大抵右より言へるが如し然まど尚病により殊  
 老人小兒を飲むも入るも宜しき程を慎むべしをて湯浴を  
 醫薬の力を補助するものや心得べし且温泉なる土地を大  
 抵山地より多々れを空氣も常に清鮮なりし且家とあるれ  
 旅中より何れも家事を片とること最養生とあるなり  
 故に身持を善くし物を風く起き夜を早く寝居間衣服未  
 だ浄くし殊り飲食を以て之最も房事を物事より心配する  
 安然やして樂むべし此れ湯治養生の本旨あり人々も  
 湯治より来き日日夜夜遊樂に耽り飲食の度を過し猥

衰しやうをまさめ我人われひとどもち静養しやうやうの道みちせ妨さまたぐるもの多おほし深ふかく  
 慎しんむむき事ことあり又客きやくを暑あつを避さぐるが為ために來きる者もの多おほくは  
 夏なつを雜まじ還かへること殊ことに甚おほし故ゆゑに實まことに病まはる為ためにして閑暇ひま多おほし  
 其人其人を四よ五ご六ろく月の頃ころに到いたるに客きやくと旅亭りやうていや共ともに便利べんりありと  
 入いりて

伊香保志上卷了



Kitasato Memorial Medical Library